

# 実践女子大学短期大学部設立 70 周年に寄せて

小 林 修

実践女子大学短期大学部 名誉教授  
(2017 年 3 月 31 日 日本語コミュニケーション学科 退職)

実践女子短期大学（現実践女子大学短期大学部）が 70 周年を迎えられたことに心からの祝意を表したいと思います。日野キャンパスに 30 年、渋谷キャンパスに 3 年と通算 33 年もの長い間実践の短大にお世話になった者としては、振り返ってひとしお感慨深いものがあります。

御承知のように実践短大は 1950（昭和 25）年に戦後の新しい学校教育法に基づく短期大学制度のスタートと共に家政科が設置され、続いて国文科と英文科が設置され、長い間この三学科体制で発展を遂げて来た我が国最初の短大の一つです。戦後における女性の大学・短期大学進学率を見ると、1995 年前後までは、四年制大学よりも短大への進学率の方が常に上回っていました。私が奉職した頃の実践女子短期大学は、渋谷から日野へキャンパス移転をした後でしたが、こうした女子進学率の向上と相俟って本学は全盛期を迎えつつあった時期でした。私の所属する国文科でも 1 年生の必修授業が 250 人位あったこともありました。他学科も同様に定員を大幅に超える入学生を迎えていました。しかし女子の大学進学率は、2000 年には四大が 31.5%、短大が 17.2%と逆転し、2005 年には四大が 36.8%、短大は 13%と大きな落差を示すようになりました。これは少子化による 18 歳人口の減少とも相俟って全国の短期大学に深刻な影響をもたらしました。これに加えて、いわゆるバブル経済の崩壊後の経済不況と長引く就職氷河期、リーマン・ショックによる世界不況、さらには東日本大震災と原発事故など、この 25 年間程は大きな社会変動と打撃に見舞われた時代でした。このような厳しい社会的背景の下、大学、短大においては、従来の教養系よりも実学・資格系への志望が急増し、短大よりも四大、女子大よりも共学志向の傾向が顕著になり、本学も厳しい状況を経験して来ました。1996 年には全国で 598 校あった短期大学は 2019 年には実に 326 校にまで激減しています。そうした厳しい状況が続く中で、本学は学科名変更やカリキュラム改革を始めとする様々な改革を不断に続けることによって何とか乗り越えて来ました。そして 2014 年渋谷移転に際し、日本語コミュニケーション学科・英語コミュニケーション学科の文系 2 学科からなる短期大学部として、新しいスタートを切ることになったのは記憶に新しいところだと思います。かつての 4 学科構成から食物栄養学科は四年制大学化、生活福祉学科は廃止、日コミ、英コミも定員削減という大幅にサイズダウンした上での厳しいスタートでしたが、移転後は一転して順調な歩みを続けていることはまことに喜ばしく慶賀に堪えません。10 年前、私が短大部長を務めていた頃の短大はたいへん厳しい状況におかれ、東日本大震災なども重なり、とても 60 周年を祝うような状況にはありませんでした。今回はコロナ禍の中、祝賀行事などは出来ないようですが、短期大学部として順調な発展を重ねてい

る中で 70 周年を迎えられたことは本当に嬉しいことと思っています。とはいえ、今後、短大ばかりでなく四大も含めて全国の大学はコロナ後を見据えた厳しい試練が待ち受けており、その模索のただ中に置かれていることと拝察しております。実践の歩みが途切れることなくいっそう発展して行くことを願って、教職員の皆さんに心からのエールを送りたいと思います。